食べることは基本的な楽しみの一つ

―医師を目指したきっかけは何ですか。

▼林氏　父は歯科医で、中学生のときに父を胃がんで亡くしたことが、医師を目指したきっかけです。ブラックジャックのような天才外科医になりたくて、千葉大学卒業後は、東京女子医科大学病院の消化器外科に入局しました。東京女子医科大学では食道がんの外科医として、手術や内視鏡治療を行っていました。その後は手術での治療に限界を感じて、アメリカに留学し、臨床医としてがん内科医をやりながら、抗がん剤やがんの遺伝子について学びました。

―医師としてのこれまでを振り返ってみてどうですか。

▼林氏　二十代は本当に忙しくて、一カ月に五日、自宅に帰れるかどうかで、家族とは、自宅の近くにあるファミリーレストランで会う程度でした。また、当時は給与が本当に低くて、勤務医になって最初の二年間は、月額四万五千円、年収では五十万円程度の収入しかありませんでした。そのため、生活保護世帯と同等の収入しかないため、子ども用の粉ミルクを区から支給されるほどでした。しかし、それでも家族がついてきてくれました。その時々の自分の生き方は、間違ってはいなかったと思います。

ただ、「苦労は買ってでもしろ」といいますが、私はそうとは思いません。苦労はしないほうがいいと思います。必要なのは、相手の苦労をわかってあげる気持ちだと思います。「苦労は買ってでもしろ」という人は成功者だけです。実際に同じことが起きて、ダメになって死んでしまっては元も子もないですし、そちらの方が、圧倒的に多いと思います。成功者がいっているだけで、同じことをして成功者になっていたら、みんな成功者になっています。

―歯科医療界でも医科歯科連携や周術期の口腔機能管理のことを重視しています。歯科医師に期待することは。

▼林氏　歯肉がんが進行していると、顎骨ごと切除しなければなりません。そうすると、食べることもこれまでのようにできなくなります。口の中にできる歯肉がん、舌がんといった口腔がんは、体の中にあるがんとは違って、注意深く診ることで、目視で確認できて見逃すことのリスクを低減できます。さらに、歯科は、命を守ることとともに、患者さんのQOLを低下させないことが大事です。食べることは生きる上で基本的な楽しみの一つです。若い頃は何でもできますが、末期の方においては、食べることは唯一の楽しみともいえます。このような分野でも、歯科の先生方に期待しています。

―大切な言葉は。

▼林氏　私が入局した医局の初代教授は、世界的に有名な外科医の中山恒明先生です。彼の金言として、「成功するのは簡単だ。やめなければいいのだ」といっていて、それはすごくシンプルだけど、すごく的を射ていました。目標に向けて歩かなければたどり着けないし、やめずに続ければ、たどり着くかもしれない。

今、チャレンジしている会社も従業員は一人しかいないし、借金だらけ。やっと今年になって僅かですが収益が上がるようになりました。ここでやめずに続ければ、がん患者の就労支援が広がり、一部上場企業にだってなれるかもしれない。私たちの医局の人たちは、あの中山先生の言葉を今も格言のように語り継いでいます。続けていくことが大切です。

▼本日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございました（了）

▶林先生がつくるヨーグルトはネットからお買い求めいただけます。
神楽坂乳業合同会社
ホームページ
https://kagurazaka-milk.co.jp/
神グルト　検索

■インタビューについてのご感想は、氏名と連絡先を明記のうえ、info@tokyo-sk.comへお寄せください。過去のインタビューは、当協会サイト（https://www.tokyo-sk.com/）でも、ご覧になれます。

連載を終えて　歯科医療界の「常識」に一石を投じたつもり

水谷惟紗久 氏から「ひと言」

日本歯科新聞社
月刊「アポロニア21」編集長

この機関紙2019年10月号から21年3月号まで、「医療者・患者を救うシステム考」を18回連載していただいた水谷さん。連載前に咽頭がんが見つかり、その後、入院手術されたにもかかわらず、お原稿は一度も欠かさず、しかも自らの足でかせぎ、目と耳で確かめ、追究された内容ばかり。通信員のアンケートでも、毎回かなりの高評価を得た。水谷さんに連載中の余話、協会についての感想などを伺ってみた。

―18カ月にわたる連載、お疲れさまでした。この間のご感想について、まず、実際に読み手の反応を実感されたことはありましたか。

▼水谷さん　職業柄、普段、数多くの記事を執筆していますが、東京歯科保険医協会の機関紙に連載した「医療者・患者を救うシステム考」以外で、自分の氏名が入った記名記事はそんなにありません。そのため、仕事で歯科医療関係者にお会いした際、「この前、保険医新聞の連載読みましたよ」と、生身の反響を聞く機会があり、嬉しかったです。また、東京歯科協会主催のメディア懇談会の配布資料の機関紙が入っており、私の写真と文章が掲載されているのを見るとドキドキしましたね。ほぼ毎回、過分なスペースを取ってレイアウトしていただいており感謝しています。

―患者として入院・治療を受けた際、どのように過ごされましたか。

▼水谷さん　自分自身がん治療のため入院したことは、医療側と患者側双方の実際をじっくり見る機会にもなりました。例えば、薬剤師の病棟業務、周術期の口腔機能管理など、薬剤師や歯科医師、歯科衛生士のフロンティアとされている領域では、現場レベルでも制度上も、もっと内容を練り上げた方が良いと感じる点もありました。また、コロナ禍との関連でいえば、ちょうど、一回目の緊急事態宣言が出されるタイミングで、取り残しの食道がんを内視鏡手術することになり、医療崩壊の不安を身近に感じました。大規模な感染症の拡大は、医療全体を疲弊させるのだと実感しました。ややもすれば「感染症は過去の病気」とみなして慢性疾患への対応、予防医療へのシフトを進めてきた先進諸国の医療システムが、今回のコロナ禍で打撃を受けたことを目の当たりにしたからです。

―今回の連載で、特に訴えたかった点を。

▼水谷さん　歯科医療に限りませんが、とかく「欧米では…」といういい方がなされます。話す側と聞く側も、そのような会話に安堵するようです。しかし、それらの話には意外なほど根拠がないことが多いのです。今年1月号の「歯科先進国では〇〇ってホント？―日本はもう少し自信を！」では、その点を特に指摘しました。連載では、あえて米国の例はあまり触れませんでした。これは、日本の社会保障システムが欧州をモデルに構築されてきたためですが、実際には、欧州も米国も日本も、出発点が共通していることはあまり知られていません。以前から「米国は民間保険の国」とされています。しかし、歴史的には欧州や日本だけでなく、米国でも公的医療制度創設の議論がスタートしたのは、第1次世界大戦が終了した少し後の1920年代初頭でした。ただ、米国の場合、医師会などが「社会保障制度は社会主義的政策」として、協力に消極的な態度を示したことが、第2次世界大戦前後の福祉国家づくりに米国が乗っていかなかった理由のようです。

今回のコロナ禍にあって、米国は欧州諸国並みに、コロナ患者の入院枠を含む医療体制を整えました。このことは、米国の医療も、方向性は違っても公的医療の側面を備えていることを物語っています。

―今回の連載などを通じ、当協会にどのようなイメージを抱きましたか。

▼水谷氏　東京歯科協会とのやり取り、主催のメディア懇談会に参加しての経験から、一方的な情報発信だけでなく、メディア側の意見も丁寧に聞く。役員の説明や質疑応答などの説明が分かりやすい。そういったスタンスがあると思いました。メディア懇談会で説明に当たる方々は、臨床の現場を持っていて、現場の実感からお話されていて、説明に説得力があると感じることが多いです。

―今の歯科医療界を見渡すと、どのようなことを感じますか。

▼水谷氏　医療制度論議の中で、歯科には患者利益の視点が医科より少ないのでは？と受け取れることもあります。「このままでは食べていけない」など、おっしゃることは理解できるのですが、正直すぎるのかな…。

近代医学は、18世紀に医療が「商品」となり、値段がついたために普及した面があります。それまでの欧州の医療は、地方自治体や宗教組織が独占的に所有、管理していました。そうした軛から開放されたことが医療の爆発的な発展につながったのです。しかし、それだけでは医療の質を担保できませんから、19世紀になり、薬事承認制度と医師資格の国家管理が進み、歯科医師を含めた臨床医の育成が大学教育と国家試験によってなされるようになりました。そこでは「医療倫理」、「公衆衛生」が必須で教育されます。

医療従事者の高度な社会性は、コロナ禍のような事態でのみ発揮されるものではありません。あらゆる医療従事者が、心のどこかで持っていることが求められているでしょう。

―今後の当協会に期待すること、望まれることなどについて。

▼水谷氏　現在、歯科と医科の垣根がなくなってきています。東京歯科協会と東京保険医協会は医科歯科連携の会議を持ったり、講習会を共催したり、さらに一般の方向けの「医科歯科健康まつり」などを開催しています。歯科の強みは、小児で受診してから中高年や老齢になるまで関われることですから、こうした活動には、特に注目しています。

かかりつけ歯科医制度が歯科に根付き、患者さんが一生涯付き合い続けられる関係。歯科医師が、患者さんの健康を一生涯守る指導ができる関係を作ってもらいたいと思っています。そのためのサポートができる組織として、今後も発展されることを期待しています。

―貴重なお時間をありがとうございました。今後も御社の出版活動、新規事業展開に期待しています。（了）

≪プロフィール≫
☆水谷惟紗久（みずたに・いさく）
株式会社日本歯科新聞社発行の月刊『アポロニア21』編集長。早稲田大学第一文学部卒。慶応義塾大院文学修士。早大院社会科学修士。社団法人北里研究所研究員（医史学研究部）を経て、1998年より現職。著書に『18世紀イギリスのデンティスト』（2010年）、『歯科医療のシステムと経済』（2020年）など。2017年大阪歯科大学客員教授。2018年末、下咽頭がんで声を失ったが、電気喉頭を使い取材や講義も続けている。